

群 教 セ	H01 - 01
	平16.221集

思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ

幼児の育成

——— 幼児同士のかかわりに応じた場の構成の工夫を通して ———

特別研修員 大朧 章子 (館林市立西幼稚園)

《研究の概要》

本研究は、幼児同士のかかわりに応じた場の構成の工夫を通して、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児が育成していけることを明らかにしようとしたものである。具体的には、教育課程を踏まえたうえで、本学級の幼児同士のかかわりの姿を時期として押さえその時期に応じた、場所、時間、雰囲気や物の構成、教師のかかわりなどの場の構成を工夫していくことで幼児の変容をとらえようとしたものである。

【キーワード：幼児教育 幼児同士 場の構成 思いや考え 言葉で表現】

I 主題設定の理由

現在、幼児を取り巻く環境は、核家族化や少子化が進み、過保護・過干渉の中で育っている幼児が多く、必要な言葉を使わなくても物事が進んだり、兄弟姉妹の間でも、切磋琢磨する経験が少なくなったりしている。また、電子機器の普及により、家に居ながらにして楽しめるテレビやビデオ、テレビゲームなどで遊ぶことが多くなり、人とかかわる機会が減少している。

幼児期は、言葉に関心をもつようになり、ものの見方や考え方を自分なりに理解していく時期である。幼児は、自分の思いや考えを言葉で表現し、聞いてもらえるうれしさを感じていくと、人の話も聞こうとするようになる。これらのことから幼児期の言葉は、人とかかわりの仕方を身に付けていくために大切であり、幼稚園生活における幼児同士のかかわりの中で、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児を育てていくことが必要であると考えた。

本学級は、3年保育 20名、2年保育 6名（新入園児）の4歳児の混合クラスである。進級当初は、友達に合わせることで安定している幼児や、相手の思いに心が向けられずに自分を通そうとする幼児などの姿も見られた。

いままでの自分の保育を振り返ってみると、幼児の言葉の背景にある思いや考えを幼児の気持ちになってとらえることが少なかった。また幼児同士のかかわりに応じた場の構成が不十分だったことが反省点としてあげられる。園生活において幼児同士でかかわりながら心や体で感じたり、言葉を聞く、知る、使うなどをおして、いろいろな言葉を身に付けたりする経験は家庭ではできないものが多い。これらの経験を積み重ねる中で、自分の思いや考えを言葉で表現するようになってほしいと考える。そこで、幼児同士のかかわりに応じた場の構成を工夫していくことで、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

幼児同士のかかわりに応じた場の構成の工夫をすることにより、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児が育成できることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 一緒に遊びたい友達や教師とかかわって遊ぼうとする時期に、落ち着いて話せる雰囲気の場合を構成すれば、安心して自分なりに言葉で思いや考えを表現するようになるであろう。
- 2 友達とのかかわりを広げながら遊ぼうとする時期に、言葉に興味をもちそうな教材活用した場合を構成すれば、自分から言葉で思いや考えを表現することを楽しむようになるであろう。
- 3 友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期に、考えたり工夫したりしたことを相談しながら一緒に遊べる場合を構成すれば、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶようになるであろう。

Ⅳ 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児について

思いや考えを言葉で表現するとは、幼児が、見たり、聞いたり、経験したりしたことを、自分なりに言葉で表すことである。そして、伝え合う喜びを感じながら友達と一緒に遊ぶことを楽しむ幼児を、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児ととらえた。

具体的には次のような姿ととらえた。

見通し 1	<ul style="list-style-type: none"> ○一緒に遊びたい友達とのかかわりの中で、身近な出来事を話す。 ○教師に親しみを感じ、友達のことや、自分で経験したことを話す。 ○自分の話したことについて、友達や教師の表情・言葉などを見たり聞いたりする。
見通し 2	<ul style="list-style-type: none"> ○自分なりの言葉で話すことや聞いてもらえるうれしさ・心地よさを感じる。 ○見たり、聞いたり、経験したりしたことなど心に残ったことを話す。 ○友達や教師の話を、関心をもって聞こうとする。 ○いろいろな言葉に触れ、知ったり気付いたりして自分も使ってみようとする。
見通し 3	<ul style="list-style-type: none"> ○いろいろな言葉から意味をイメージする。 ○自分の思いや考えを自分なりの言葉で表現する。 ○友達の話に関心をもって聞く。 ○友達や教師と言葉を交わしながら、思いを共有する。

(2) 幼児同士のかかわりに応じた場の構成の工夫とは

幼児同士のかかわりに応じて、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるように必要と思われる場を構成し、場所、時間、雰囲気や物の構成、教師のかかわりなどの工夫をすることである。

そこで、幼児同士のかかわりに応じた場の構成としては、次のようにとらえた。

<ul style="list-style-type: none"> ○一緒に遊びたい友達や教師とかかわって遊ぼうとする時期 <ul style="list-style-type: none"> ・幼児の興味・関心に合わせ玩具の数量を考慮したり、十分な時間の保障をしたりする。 ・幼児の話したい気持ちを引き出す雰囲気をつくり、幼児の話を熱心に聞いたり、分かりやすく話したりする。
<ul style="list-style-type: none"> ○友達とのかかわりを広げながら遊ぼうとする時期 <ul style="list-style-type: none"> ・絵本を活用し、幼児が言葉に興味をもちそうな教材を提示したり、遊びに取り入れたりする。 ・幼児の遊びごっこ、楽しさを共有する。
<ul style="list-style-type: none"> ○友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期 <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの幼児が触れ合えるような広い空間を確保する。 ・幼児同士が思いや考えを言葉で表現しながら一緒に遊べるような絵本や素材を用意したり、幼児の思いを受け止めたりする。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

(1) 実践計画

対象	館林市立西幼稚園 2・3年保育 4歳児 26名（男児13名・女児13名）
期間	平成16年5月～11月

(2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	一緒に遊びたい友達や教師とかわかって遊ぼうとする時期に、幼児がゆったりと友達や教師とかわかり、したい遊びが十分楽しめる時間を保障したり、明るい雰囲気をつくり、話を丁寧に聞いたり分かりやすく話したりした場を構成したことは、安心して自分なりに言葉で表現できるようになるために有効だったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の表情・言葉・幼児同士の会話・遊びへの取組の様子から、変容をとらえる。 ・他の教師からの情報や保護者の言葉などから、変容をとらえる。
見通し2	友達とかわかりを広げながら遊ぼうとする時期に、いろいろな言葉に触れることができる絵本を活用したり、楽しさを共有できる遊びを取り入れた場を構成したことは、自分から言葉で表現することを楽しむようになるために有効だったか。	
見通し3	友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期に、幼児たちの興味・関心をとらえ、友達とかわかりながら思いが実現できる時間を保障したり、考えたり工夫したりして一緒に遊べるような絵本や素材を提示したりした場を構成したことは、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶようになるために有効だったか。	

V 研究の展開

2・3年保育4歳児の教育課程、V期、VI期、VII期のねらい、内容を踏まえて実践する中で、「思いや考えを言葉で表現する」ことに視点をあて、幼児の生活する姿から幼児同士のかかわりに応じた場の構成を工夫していくことで、その有効性を明らかにしていく。

1 V期・VI期・VII期の指導計画 (館林市立西幼稚園教育課程より抜粋)

期	V期(4月~5月)	VI期(6月~9月)	VII期(10月~12月)
ねらい	○自分のしたい遊びを見つけ、気の合う友達や先生と一緒に遊ぶようになる。	○先生や友達と一緒に触れ合いながら、遊びを楽しむようになる。	○自分から気持ちを出して、いろいろな遊びに取り組みようになる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びを友達や先生とする。 ・先生との触れ合いを楽しんで一緒に遊ぶ。 ・友達の遊びに興味をもち、同じ遊びをしたり、友達とかわかったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な遊びのルールを知り、グループや集団で遊ぶ。 ・絵本や紙芝居を見たり、歌を歌ったり、体を動かしたりする。 ・好きな遊びの中で、自分の気持ちを言葉や態度で表して遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に自分のしたいこと、してほしいことを伝える。 ・見たこと、聞いたこと、経験したことを先生や友達に話す。 ・先生や家の人が絵本や絵本を喜んで見る。 ・思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ。

2 各時期における場の構成

時期	一緒に遊びたい友達や教師とかわかって遊ぼうとする時期	友達とかわかりを広げながら遊ぼうとする時期	友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期
場の構成	場所	・遊びが交錯しないようにコーナーをつくる。	・自由に行動し、のびのびと活動できる広い空間をつくる。
	時間	・友達と安心して遊びができるように十分な時間を保障する。	・思いや考えを言葉で表現しながら遊びを進めていく時間を保障する。
	雰囲気	・幼児が声を掛けたくなくなるような雰囲気を避ける。	・自分の思いや考えを言葉で伝え合える和やかな雰囲気をつくる。
	物の構成	・慣れ親しんでいたと思われるままごと道具や砂場の道具、ブロックなどの遊具を、多めに用意しておく。	・絵本を読んだり、歌を歌ったり、音楽をかけた場を準備する。
教師のかわり	・幼児の話す言葉を、目を見ながら丁寧に聞く。	・幼児の遊びの中に加わって楽しさを共有し、幼児の言葉を聞いたり他の幼児に知らせたりしながら、言葉で表現したうれしさや楽しさが味わえるようにかかわっていく。	・幼児が言葉で表現しながら遊ぶ姿を温かい目で見守る。

VI 研究の結果と考察

- 1 一緒に遊びたい友達や教師とかかわって遊ぼうとする時期に、幼児がゆったりと友達や教師とかかわり、したい遊びが十分楽しめる時間を保障したり、明るい雰囲気をつくり、話を丁寧に聞いたり分かりやすく話したりした場を構成したことは、安心して自分なりの言葉で表現できるようになるために有効だったか

《ボーリングやりたいな》

5月20日(木) 友達とかかわることが少ないA児に対して、見たり感じたりしていることを見取りながら、さりげなく話し掛けたりA児の話を聞いたりすることに努めた。新入園児のB児が「ボーリングの玉だよ。」と、ブロックで作ったボールを教師の前で転がした。教師に見せることで認めてほしいという思いがあったのだろう。教師は「カタカタいって回っているよ。面白いね。」と言葉を掛けた。

教師とB児とのやり取りを見ていたB児が「ボーリングやりたいな。」と言ったので、「面白そうだね。」とA児の提案を受け入れた。A児の話を丁寧に聞くようにしたところ、「ボーリングにはボールで倒すものがないとだめなんだよ。10個。それから、まあいいボールじゃないと転がっていかないよ。」など、A児の知っているボーリングのイメージがどんどん言葉になって出てきた。

教師は、幼児の思いや考えを聞きながら、幼児と一緒に手作りのボーリングの用具を準備したいと考え、ボールを新聞紙で作ることを提案した。新聞紙を広げ丸める場として机を移動して広い場所をつくり、A児と一緒に新聞紙のボール作りを始めた。興味をもった幼児が集まってきて、C児が「何作っているの。」と聞くと、A児は「ボールだよ。」と答えた。「へえ、新聞紙でボールができるんだ。」「一緒にやっていたい？」と、C児は一緒に遊びたい思いを伝え、5人の幼児と一緒に新聞紙を丸めはじめた。A児は、箱の中にあつたペットボトルを10本持ってきて並べると、「全部倒れるとストライクって言うんだよ。」と言い、ボーリング遊びが始まった。B児も仲間に入ってきた。全部倒した幼児のときに「ストライク。」と教師が言ったところ、D児が「先生、ストライクのときにタンバリンを鳴らせばいいんじゃない。」と言った。「いい考えだね、楽しそう。」と言うと、「僕がタンバリンを鳴らすよ。」と言い、持ってきたタンバリンをストライクのときに元気に鳴らし、とてもにぎやかな場となった。

いつの間にかペットボトルを並べる係になっていたA児が、「僕も倒したいよ。自分の倒したペットボトルは自分で並べるといいんじゃない。」と言った。A児は教師と遊びの準備をしたり、遊びを進めたりしていく中で自分の思いや考えを教師や友達に言うことができた。他の幼児たちもA児の思いや考えを知り、自分で倒したボールは自分で並べるというルールが生まれた。その後、ボーリング遊びがしばらく続いた(資料1)。

以上のことから、A児は他の幼児が作ったものから遊びのイメージを広げ、遊びたい思いを教師に伝えてきた。これは、A児にとって安

心して言葉で表現できる雰囲気だったからではないかと考えられる。このことから、A児の思いを受け止め、遊びが実現できるようにA児の話をよく聞いたり、ゆったりと時間を掛けて遊びを進めたりしていけるような場を構成したことは、安心して自分なりの言葉で表現できるようになるために有効であったと思われる。

- 2 かかわりを広げながら遊ぼうとする時期に、いろいろな言葉に触れることができる絵本を活用したり、楽しさを共有できる遊びを取り入れたりした場を構成したことは、自分から言葉で表現することを楽しむようになるために有効だったか

資料 1 ボーリングで遊ぶ幼児



《私もペープサート作りたい》

9月8日(水) 『ゴリラのパンやさん』の絵本に興味をもち、「また読んで。」という幼児の声に答えて、簡単にできる手作り教材であり扱いやすいこと、さらに遊びに行かせるのではないかと考え、ペープサートを準備した。教師の言うゴリラのせりふを真似して「へえい、いらっしやい。」と、言いながら参加している幼児がいた。

「私もペープサート作りたい。」と幼児たちが集まってきたので、材料を渡す。「私はヒツジをかくよ。」「僕はニワトリ。」「私はウサギにしよう。」「私もウサギだよ。」と、それぞれ自分の好きな動物を作りたい気持ちになったようだ。自分で作ったペープサートを動かしながら「こんにちは。」「パンくださいな。」など絵本の中のせりふを言い合っていた。そこで、体を隠して演じることができる場所をつくと出番の順に並び、せりふを言う部分は教師の援助を受けながら、ペープサートを演じることを喜んでやっていた(資料2)。

資料2 ペープサートで遊ぶ幼児



次の日、幼児たちの大好きな『ねずみくんのチョコッキ』のペープサートを準備し、幼児の前で演じた。すると、普段はあまりかかわりのないE児とF児が『ねずみくんのチョコッキ』の役を交代しながら、繰り返し演じることを楽しんでいた。見ている幼児、演じる幼児が増え、「ねえ、たんぼぼさんも呼んでこよう。」「ちゅうりっぷさんも呼んでこよう。」「園長先生も呼んでこようよ。」という声が出てきた。絵本の中のせりふを言い合うことから遊びの楽しさを友達と共有する中で、言葉で表現することが楽しいと感じてきたようだ。「お客さんが増えると楽しいね。」と、教師も幼児たちの提案に賛成した。演じる幼児たちの声も一層大きくなり「ちょっときついが似合うかな。」とせりふを言うと、見ている幼児の中から「似合う、似合う。」と反応する言葉が聞かれ、演じる幼児と見ている幼児が一体となって楽しんでいる様子が見られた。

以上のことから、幼児たちは絵本に興味や関心をもち、幼児たち自身が絵本の中の登場人物になって楽しみ、ペープサートを動かしながら演じたり、見ている幼児がせりふに参加したりするなど幼児同士がかかわっている場面を見ることができた。このことから、みんなでいろいろな言葉に触れたり使ったりできるような絵本などを活用したり、楽しさを共有できる遊びを取り入れたりした場を構成したことは、幼児が心地よさやうれしさを味わい、自分から言葉で表現することを楽しむようになるために有効であったと思われる。

3 友達と一緒に遊びを楽しもうとする時期に、幼児たちの興味・関心をとらえ、友達とかかわりながら思いが実現できる時間を保障したり、考えたり工夫したりして一緒に遊べるような絵本や素材を提示したりした場を構成したことは、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶようになるために有効だったか

《車で飴を運ぶんだ》

10月20日(水) ブロックで作った車や飛行機を見せ合ったり、友達の襟元に紐を付けネコごっこをしたりして遊ぶ様子が見られた。

幼児たちは動くものに興味・関心をもち、使うものや組み立て方を考えたり工夫したりして遊びを楽しんでいた。そこで、『リサイクルでつくっちゃおう』の本を提示し、家庭の協力のもとに収集した空き箱やストロー、竹ひご、幼児と一緒に拾い集めた木の実などの素材を準備した。そして絵本や素材を使いやすいように分類し、幼児たちが作ったり友達のものを見たり真似たりしやすいように十分なスペースや時間を保障することに努めた。

ブロックの構成遊びが好きなG児が登園すると早速、『リサイクルでつくっちゃおう』の本を開き、「先生、この車を作りたい。」と言ってきた。「何を準備すると作れるかなあ。」と、教師はG児と一緒に絵本を見ながら材料を準備し、一緒に作り始めた。登園してきた幼児たちも

G児の作っているものに興味をもち、「僕も作る。」「何を持って来ればいいん？」などと友達に聞いたり、教師に援助してもらったりしながら、ほとんどの幼児が思い思いの箱で車を作った。出来上がったG児が「車で遊ぼう！」と言うと、H児たち4～5人の幼児が「おう」と掛け声を掛け、それぞれに作った車を持ち一緒に行動していた(資料3)。

資料3 車で遊ぶ
幼児



翌日、工夫を加えて持ってきたI児の車を見て、幼児たちが「先生、アンテナ付けるからストローちょうだい。」「僕は小さい箱を付けてトラックにする。」などと工夫している姿が見られた。J児が「先生、プリン丸の丸い入れ物にタイヤが付けられるかなあ」と聞いてきたので、J児の工夫を認め励ました。しばらくすると、K児が「先生見て！Jちゃんがアヒルを作ったよ。くちばしもあるしねえ、リボンも付いてるんだよ。すごいね。」と言ってきたので、教師は友達の工夫に気付いたK児を認め、工夫してアヒルを作ったJ児の発想と努力をほめた。その後、3歳児のときにどんでん餅で飴を作ったことを思い出したL児が「先生、どんでん餅で飴が作りたいから光る紙ちょうだい。」と言ってきた。教師はすぐにカラーセロファンだろうと思ったので、「これでいいの？」と聞くと、「そうそう、それ。」「車で飴を運ぶんだ。」とL児は満足そうな表情をしていた。

以上のことから、空き箱や空き容器を使った遊びにほとんどの幼児が取り組み、幼児なりに工夫を加え楽しんだ様子が見られた。また、遊びの楽しさを友達と共有する中で、イメージを膨らませて工夫したり、他の幼児の工夫に気付き認めたり、その過程で様々な言葉が表現されていた。このように、友達とかかわって遊ぶことが楽しい、動くものに興味をもっているようだと見取った時期に、幼児が関心を示しそうな絵本や素材、思いが実現できる時間や場所を保障した場を構成したことは、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶようになるために有効であったと思われる。

VII 研究のまとめと今後の課題

- 思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶ幼児を育成するために、幼児同士のかかわりに応じた場の構成の工夫をしてきた。その結果、幼児は園生活において幼児同士でかかわりながら遊び、遊びの楽しさを友達と共有していく中で、友達のいろいろな言葉に触れたり、言葉を通して思いや考えを伝えたりしながら遊びを進めていった。幼児同士のかかわりの時期に応じた場の構成の工夫をしたことは、思いや考えを言葉で表現しながら遊ぶことにつながったと考える。
- 場の構成の工夫として、幼児同士のかかわりに応じることに視点をあて、場所、時間、雰囲気や物の構成、教師のかかわりなどの場の構成を行った。幼児の心の状態や友達関係を見ながら場所、時間、雰囲気を考慮したり、遊びへの興味・関心をとらえて教材や素材を提示したり、幼児の発達に合わせて手を貸したり言葉を掛けたりして援助をしてきた。その結果、幼児同士のかかわりが広がり、幼児同士が刺激し合いイメージを膨らませて、思いや考えを言葉で表現しながら遊びを進めていく姿が見られた。
- 言葉は人とかかわっていくために欠くことのできないものであると考える。様々な絵本や素材を活用しながら、幼児が言葉で表現することが楽しいと感じたり、人にとって心地よい言葉があることに気付いたりしながら、言葉を通して人とのかかわりの仕方を身に付けていくことができるように、今後も実践を積み重ねていきたい。

<参考文献>

- ・ 瀬地山 滯子 著 『三才から六才へ』 京大幼児教育研究会 (1997)